

# 仏教からみた 脳オルガノイド

師 茂樹（日本学術会議 連携会員／花園大学）

# 問題の所在①

- 科学技術における倫理的課題について、文化的多様性を配慮する必要がある
- 生命科学分野については「応用倫理学の議論に比べて、宗教学の議論が顕著に少ない」（澤井2019）
  - 「文化の盗用という懸念」「文化的多様性に配慮しているという口実」（神崎2019）
- 研究・開発のスピードに対応できる研究は可能か

## 問題の所在②

- 文化の多様性と（ある程度の）普遍性のあるルールづくりには、宗教が大きな役割を果たす
  - 「……命とは何かというふうなことについては多様な文化があるけれど、それを大きなまとまりで考えていくと宗教伝統の影響が大きいし、共同の合意をつくっていくときには、その宗教伝統を参照することが助けになると思います。
  - 日本の場合には仏教とか神道とか儒教とかいろいろな宗教伝統がありますから、それを参照しながら日本人として納得できるルールづくりをやっていくと同時に、それが世界のルールづくりとどうかかわっていくかということを議論していく必要があります。」（島藺ほか2012）

## 論点① 聖典にない問題への態度

- 仏教：聖典に書かれていないことであっても、聖典から演繹して判断することはできる
  - Cf. アビダルマ仏説論（法の本質にかなうのであれば仏説とみなす）

## 論点② 胚を使った研究は認められるか

- 仏教：受精卵（胎）は衆生の可能性がある
  - Cf. 胎内五位説
- 仏教：（仏教徒は）胚を破壊する研究はすべきではない
- 仏教：ただし、研究の成果を利用することは、条件によって可能かもしれない
  - Cf. 三種の浄肉
  - Cf. 大乘仏教における肉食の禁止

# 先行研究の見解

- すべての胚が衆生ではないが、「どの胚が生气を帯びていて、どの胚がそうでないかを見分ける方法がない」
- 「仏教の立場から言えば、胚を破壊する実験は、生命の基本的な利益に対する直接的な攻撃であり、第一戒に違反するもの」
- 一部の利益のために一部を既存することは許されない (Keown 1995; 早島2022)
  - Cf. 「人命が多様であることを認めよ」 (シンガー1999)

## 論点③ 脳オルガノイドは生物か？

- 仏教：脳オルガノイドは“衆生（有情）”か  
→ 脳オルガノイドに“識”の連続（心相續）は宿るか
- 仏教：受精卵には識が宿る
  - Cf. 胎内五位説
- 仏教：他人の人体から作られた身体に識は宿り得る（師2018）
  - iPS細胞で作られたオルガノイドにも識は宿り得る？

## 論点④ ヒト脳オルガノイドはヒトか

- 仏教：仏教の戒律では、ヒトを殺すほうが罪が重い
- 仏教：ヒトES細胞はヒトの可能性がある（iPS細胞は？）



# 胎（≠ヒト胚）はいつからヒトか

律	いつからヒトか
『パーリ律』 『四分律』	最初の段階（カララ）から
『五分律』	入胎～49日：「似人」 それ以後：「人」
『十誦律』	身根、命根ができてから

李薇博士（蘇州大学）の資料による

## 論点⑤ 尊厳に代わる基礎づけ

- 仏典には尊厳に関する明確な記述はなく、空・無常・無我の教義は尊厳と矛盾する可能性がある (Keown 2011)
- 権利概念の根底にある自由主義哲学には限界がある。他者の境遇を改善するにはもっと深い動機＝慈悲が必要 (Garfield 1998)
  - 慈悲は、慈悲を受ける人の外部にある。外部の人々で合意が得られない場合、権利が保証されないことになる (Keown 2011)

## 論点⑤ 尊厳に代わる基礎づけ

- 仏性・如来蔵・アーラヤ識は基礎づけになるかもしれない（峰島1991；塩津1998；Keown 2011；Finnigan 2017；早島2022）
  - 通仏教的ではない
- ダルマ（正義、権利、義務などの道徳的概念群を包含する用語）による基礎づけの可能性（Keown 2011）
  - 義務論的基礎づけ
- 衆生は不幸（苦）ではなく幸福（楽）を望む。楽のためには他者によって傷つけられないことが重要（Finnigan 2017；Hongladarom 2020）

## 論点⑥ 科学者がどう扱うか

- 仏教：脳オルガノイドが生物でなかったとしても、生物を傷つけるつもりで傷つけた場合、生物を傷つけたのと同様に不善
  - 動機主義（⇔ 結果主義）（李2014）
- どのように用いるか。どのような応用を目指すか。etc.

# 補論 供養の文化

- 鯨供養、草木供養、実験動物慰霊祭など、日本の〇〇供養の背景に、自然と共生するアニミズム的心性があると肯定的に評価されることもあるが…
- 「こうした供養が現代日本で果たしている機能は、個人の私的活動を全面的に解放するための心理的・文化的装置であり、ひいてはそれが資本主義的企業経営を保証する心理的・文化的装置としても流用されている。」
- 「人間が己れの生存のために自然資源を奪取し利用する行為を正当化するための文化的・思想的方法として、西洋近代の人間中心主義イデオロギーと日本式「供養の文化」の再構築との優劣を論ずるのなどは、無意味」  
(中村2001)

# 参考文献

- 神崎宣次 (2019). 「倫理って何?」: 人工知能研究者はどう考えているのか. 人工知能, 34, 182-187.
- 澤井努 (2019). 科学と倫理・宗教: 幹細胞研究を糸口として. 現代宗教2019, 179-205.
- 塩津徹 (1998). 仏教思想と人権論の接点: 人間の尊厳の解釈をめぐって. 東洋学術研究, 37(2), 101-121.
- 島藺進, 内山節, 佐々木宏幹 (2012). 鼎談 ノーベル賞受賞 iPS細胞が投げかけた人間の「生と死」のゆくえ: 宗教界はどこまで倫理上の疑問に答えられるか. 仏教企画通信, 31.
- 中村生雄 (2001). 祭祀と供儀: 日本人の自然観・動物観. 法蔵館.
- 早島理 (2022). 生命操作と仏教: 選択される生命と生き方の選択. 本願寺出版社.
- 師茂樹 (2018). 人工知能を有情と見なすことは可能か. 日本佛教学會年報, 83, 22-39.
- 峰島旭雄 (1991). 仏教思想からみた人権. 東洋学術研究, 30(1), 105-116.

# 参考文献

- 李薇 (2014). 断人命戒における「誤殺」からみる律の「動機主義」. 印度学仏教学研究, 63(1), 358-361.
- ピーター・シンガー (櫻則章 訳) 『生と死の倫理: 伝統的倫理の崩壊』昭和堂、1998.
- Bronwyn Finnigan (2017). Buddhism and animal ethics. *Philosophy Compass*, 2017;12:e12424.
- Garfield, J. (1998). Human rights and compassion: towards a unified moral framework. *Buddhism and Human Rights*. Curzon Press.
- Hongladarom, S. (2020). *The Ethics of AI and Robotics: A Buddhist Viewpoint*. Lexington Books.
- Damien Keown (1995). *Buddhism and Bioethics*. Palgrave Macmillan.
- Damien Keown (2011). Buddhist Ethics: A Critique. *Buddhism in the Modern World*. Routledge.